

すべてのこと相働きて 2

この手紙は獄中書簡と新約聖書では呼ばれています。牢屋の中で書かれ、そこから出された手紙という意味です。しかし、同時にパウロの書いた7つの手紙のなかでも喜びの手紙として名高い、そういうフィリピの信徒への手紙をいまご一緒に読み進めています。

今日読みました個所には「わたしにとって、生きるとはキリストを生きること」という小見出しがついています。これは、パウロの信念というか、彼を支えている生き方の中心を、ひと言で言い表したものです。「わたしにとって、生きるとはキリストを生きること」という言葉はよく噛みしめたいですね。この言葉の直接の説き明かしは来週になりますが、ここで述べられていることは、このあと全体で4章にわたるフィリピの信徒への手紙の主題が提示される個所です。この主題は喜びのしらべともいべきメロディなのですが、これが5つの変奏曲となって、主題を少しずつ言い換えながら手紙の終わりに向かって展開されていきます。そういう意味では非常に考え抜かれた手紙の構成というか、独自のレトリック、文章技法を駆使して書かれた手紙だというのが学者たちの一致した意見です。その主題は「苦しみのなかにあって喜べる」、「苦難のなかの喜び」というあたりに落ち着くでしょう。「苦しみ」に続く言葉はふつう「悲しむ」とか、「嘆く」とか、「絶望する」という言葉でしょう。苦しみを、わたしたちは人生に対する否定的な力と認識しますから、どうしてもそれを受ける言葉もマイナスなものになりがちです。しかし、パウロの場合は違います。ここで「苦しみ」にふつうはつながらない「喜ぶ」「感謝する」という言葉がでてくるのです。この本来つながらないものがつながるのは人間業

ではないですね。わたしたちの中からは自然には決して出てこない。それは神の働き、福音においてわたしたちに示されるキリスト・イエスの並外れた働きによって、本来つながらないはずのものがつながる。苦しみの状況が逆転する。喜びに変わる。具体的な状況として、パウロは福音を宣べ伝えた結果、捕らえられ、投獄されたわけです。今日のように人権が謳われる時代ではありません。人道的観念から監獄のなかが様々にチェックされている時代でも地域でもありません。取り調べの可視化なんてものもない。捕らえられて犯罪者として疑われれば自白を引き出すために拷問などの手段も当たり前にあった時代です。そういう劣悪な状況の監獄に、パウロが捕えられたというニュースは非常にショッキングなものとして伝わったことは間違いありません。フィリピの信徒たちにしてみれば、自分たちを福音へと導き、新しい人生の扉を開いて下さった指導者の終わりと思えたわけですから、そこに心配や混乱が生まれたでしょう。この手紙が書かれたのは、そういう不安や恐れの中にある共同体に慰めと励ましを与えることが大きな目的でした。パウロはここでみずからが捕えられたことを福音伝道が前進したと、まったく別の角度から評価をしています。泣きごとも後悔もない。まさしく「わたしにとって生きるとはキリストを生きること」という、パウロのなかに固く据えられている軸が、この危機の中にあって輝き、あらわになるのです。この手紙の前の個所で、パウロは、わたしではなく、神が、キリスト・イエスの日までに、あなたがたの中で始められた業を成し遂げてくださるだろう。完成してくださるのは神なのだと、パウロはイエス・キリストを通して、神を見るように、あなたがたを思っていつも執り成しを祈っていると伝えていました。この予想外の展開といえますか、苦難の中にあって折れないパウロの姿勢に、フィリ

ピの信徒たちは驚かされたでしょうし、わたしたちもこの手紙を読んでいきますと信仰のもつ力、苦難のなかで働く不思議な力から励ましを頂きます。それはクリスチャンを病院にお見舞いに行き、なんだか逆に励まされて帰ってくる感じと似ています。もう明らかに死が間近に迫っている。自宅には戻れないだろうということがはっきりしている。しかし、助からない病気でも暗くならない。周囲を励ますことを忘れない。有難うという感謝を忘れない。自宅に帰れずとも、天の故郷を待ち望む姿勢をもって召されていった教会員の姿から慰めと励ましを受けた体験がわたしにはたくさんあります。それはやはり福音によってつながらないものがつながっている。死が終わりではない。終わりに見える個所、どうみても詰んでるだろうと思われるところに命が光り輝いている。それはわたしの命ではなく、神の霊の働きによってわたしに注がれるキリストの命であるゆえに失われることのない希望なのです。主の復活の命に与っていると表現するしかない。それは「主、我を愛す、主は強ければ、我弱くとも恐れはあらず」とうたわれている通りのものです。このキリストがわたしのうちに生きておられるので折れない、その人が置かれている境遇と、その人の心の状態、そこから現わされてくる態度のあいだが正反対。惨めなはずなのに惨めでない。不平を吐いていそうなのに喜び、感謝し賛美している。死に怯えたり、周囲を呪ったりではなく、喜び、感謝し、みずからを支えてくれる信徒たちを覚え、執り成しの祈りをしている。このように生きることの出来る秘密はやはり罪と死の問題をキリスト・イエスが解決して下さったことを知らされ、この方を主とすることで、神とのあいだに平和を得ているからです。それが恵みの知らせとしての福音の力です。キリスト・イエスに結ばれて生きる時、このキリストの命がわたしたちのうちに

働くのです。死なない人間はいないわけですから、だれも死の問題から自由ではありませんが、死すべきこの体に、キリストの成し遂げて下さった十字架の贖いの出来事、主の愛が流れ込んでくる。死すべき身体も生かして下さる神の恵みの力が働く。それが喜びの光なのです。むかし神学校で学んでいた時に当時学長だった松永希久夫先生が、信仰者の歩みを破れ提灯に喩えられたことがありました。破れた提灯はみっともないというか、使い道がもうなくなってくるわけですが、その破れたところから中の明かりが見える。その隙間から、その人を生かしている光が見えるということですね。パウロはもっと直接に欠けた器にもられた宝という言い方をしましたが、ようは福音がわたしたちを生かすさまを言っています。信仰のいのちですね。わたしのうちに聖霊によって注がれる神の力によって、わたしではない力によって生かされることが分かる。その意味ではわたしたちが、わたしたちの持っている力や可能性によって生きるのではなく、わたしたちを越えた力によって生かされるのは人間の思いが尽きたところですよ。にっちもさっちもいなくなった地点で、そこから福音がわたしたちを持ち運んでいることが分かる。人間の真実の同伴者であるキリスト・イエスの十字架と復活の力が現わされるということなのです。

ここをパウロは確信していますから、フィリピの信徒たちにとっては意外だったでしょうが、自分の投獄によって福音伝道の業が挫折したのではなく、かえって前進した、福音の拡大に貢献したと喜ぶことが出来たのです。13節「わたしが監禁されているのは、キリストのためであると、兵營全体、その他のすべての人々に知れ渡り、主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているを見て、確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。」とい

うことが出来た。これはフィリピの信徒たちにとっては目から鱗の発言だったでしょう。そして、自分の投獄によって、新しいムーブメントが生まれた。キリストが多くの兄弟たちによって宣べ伝えられだした。しかも、それを善意で行う者もいれば妬みで行う者もいる、と書いています。このあたり、一筋縄ではいかない人間の思いといたしますか、簡単には解けない感情の問題も見え隠れしています。しかし、それでもあらゆることを通して福音は前進する。動機はどのようなであろうとも、用いられる器のかたちはさまざまであろうとも、なかに盛られた福音の真実、キリスト・イエスの十字架と復活に込められた神の真実と愛は変わることがない。この力ある福音は出会う人を必ず変えてゆく。神の言葉には力がある。だから、わたしは喜ぶ、大いに喜ぶ。そうパウロは断言するのです。苦難の中にあって折れない心、喜びがあふれ出し、周囲を照らしてゆくその有り様は、ただ彼が、神の起こされた中心的な出来事、キリスト・イエスの出来事に与っていることによります。この福音の出来事に与っていることが、いずれの境遇をも受け入れ、喜びの出来事に変えてゆく力と励まし、主の招きであることを覚えたく願います。

お祈りいたします。